

東京通信

根津界限

八木三男

根津片町（現二丁目）の「かき慎」の九尺四方の店先には、むき身のえび、赤貝、青柳、かき、あさりなど七種類ほどが、それぞれ一尺・一尺五寸ほどの長方形の白い磁瑯の容器に入れられて、計り売りされている。その傍らに生きたあさりの水槽がおりてあり、あさが時々シューと水を吹きあげる。これが「かき慎」

の売りものの全部である。

「かき慎」の親爺は七十歳くらいだろう。頭は角刈、全体に小づくりだが、目鼻だちのはっきりした面長の顔立ちには、下町のいなせな若衆の面影がほんのりとのこっているようだ。男は店先でラニングシャツにラクダの腹巻きといういでたちで、椅子に坐って日がな一日、さして一所懸命というほどではなく貝むきをしている。息子が貝むきをしているときもある。孫であろうクリツとした目の愛らしい女の子が時々店先に顔を出す。

九月十八日から二十日までは根津神社（権現）のお祭である。根津一带に一日中御興かつぎのかけ声が響いている。「かき慎」の親爺はこのあたりでもとりわけ祭気違いだという評判である。この三日間「かき慎」は店を閉めた。閉めたというよりは、店中に幕を張りめぐらして、にわか造りの囃子方の舞台になった。時間を区切って太鼓と笛の音が街中に響

きわたった。同じ街通りの町内の祭詰所に「かき慎」の親爺が紋服姿で威儀を正して坐っていた。いかにも町の重立ちといった堂々たる風格であった。

二

根津宮永町（現二丁目）の裏通りも、東側の家並みはもう谷中になる。そこに看板のない靴屋がある。店先に鉢植えがところ狭しと置いてあり、朝顔も咲いている。二坪ほどの雑然とした薄暗い店内に靴の木型がひとつだけ転がっていた。

「かき慎」の親爺と同一年くらいだろう、黒ぶちの丸い眼鏡を鼻先にずらして、坊主頭の丸顔の親爺がいた。丸首シャツに腹巻、ほとんどが白くなった不精ひげを生やしている。仕事中にはいつも頂面だが、話しかければすぐ顔をほころばす。

靴の注文はほとんどなくなった。自分と細君の靴は自分で作る。作りかけの靴を小さな出窓風のショウウインドーに飾

る。日毎にショウウインダーの靴は完成に近づいていく。いまは修理専門である。若い女たちがよく靴をもち込む。つま先の革がめくれてしまった靴は、ノリがはかれるからだという。丁寧に縫いあげて一兩日ででかしてしまふ。

谷中の祭は日暮里の諏訪神社である。

この親爺も祭に目がなく、祭の日は店を開けたままぶいと祭にいつてしまふ。

三

その爺さんは八十歳くらいだろう。店番をしていてお客が来ると奥にむかって「オーイ」と叫ぶ。自分は坐ったまま動かない。本当は動けないのである。大きな紺無地の前掛けをしているが、その蔭に瘦瓶（しゅびん）がおいてある。瘦瓶がお客に見えそうになって手元に引きよせるのだが、機敏にはいかない。体も頭も大分弱っているようだった。

不忍通りに面した根津宮永町の古道具屋である。実際は古道具は少なくて新品

がおいてある。しかしどれも少しずつ埃をかぶっているといった具合である。「オーイ」と呼ばれて中年の女がでてきた。息子の細君であらう。

この親爺も根津神社の祭がもうすぐだと若い女の客に話をしていた。

四

マンションを管理している不動産屋に頼んでおいたら、電器屋が修理にきた。

親爺とその息子である。息子といってももう中年である。呼び鈴だのロックだのが壊れている。図面をわたしておいたから、修理箇所がはじめからわかって、こういうのは助かるという。修理かと思っていたら、実際はすべて取替えなのである。「どうせお宅の費用じゃないから」と親爺はいう。親爺は息子の采配に従って仕事をしているだけだが、身のこなしは若者のようだった。

「このマンションの前の通りは、昔は川でしてね。それが文京区と台東区の境

ってえわけです。千駄木のほうにいくつてえと、昔の川筋なりに通りがくねくね曲がってしましてね、へび道ってえんです。」

積みあげた書物の山を見て、

「旦那さんは学者ですかえ」

「いや」

「旦那さんは大正ですかえ」

「生れ年？ まさか」

「じゃあ 明治ですかえ」

「殺生な！」

わたしはもう動揺して息がつけなほどだ。勢いこんで「昭和ですよ、それも七年」

「そいつぁ失礼しました。白髪だもんで。あたしは大正三年。人の齢の見さかいがつかない性分で……」

元氣よく帰っていった。店は根津一丁目の不忍通りにある。この頃の地価高騰でその辺は坪千五百万円はするという。

電器屋は地借りだそうである。

（やぎみつお＝県民教育研究所副会長）